校長室通信

令和 8 年 10 月 20 日号

志免町立志免西小学校
髙良　祐治

後期が始まり1週間が過ぎました。まだまだ日中は暑い日がありますが、朝夕はずいぶん涼しく過ごしやすく、秋らしくなってきました。今の学年の半分が過ぎた今、自分の課題を見つめなおし、どのように改善を図っていくのか、一人一人が考えてほしいと思っています。

「秋」と言えば、お祭りの季節でもあります。2週続けて校区のお祭りに参加させていただきました。たくさんの子どもたちが、とても楽しそうに過ごしている様子を見ながら思ったことがありましたので、記しておきたいと思います。

遠い日の記憶

私くらいの年齢になりますと、小学校の時の記憶は、非常に断片的になって、ほとんど残っていません。学校の先生がどのような授業をしてくれていたかなんて、まったくと言っていいほど残っていません…。

この数少ない記憶のなかで、しっかりと残っているのが、「地域のお祭りに参加したこと」です。

私が子どものころは、秋祭りではなく、「盆踊り」が夏休みに行われていました。この日が近づいてくると、普段は何もない公民館の広場中央にやぐらが設置され、隅には様々な屋台が準備され始めます。

もうこれだけで、なんだかワクワクしてきます。さらに、普段はそんなにもらえないお小遣いを少し多めにもらえ、普段よりも遅い時間まで友だちと外で過ごせるのですから、私にとっては年に一度の大切なイベントでした。

日が傾いて、公民館の広場から聞こえてくる炭坑節や太鼓の音、やぐらや広場のあちこちに灯された提灯の柔らかな明かり、友だちとあれこれ食べながら遊んだことなど、その時の「空気感」と共に「特別感」が、私の記憶にしっかりと刻み込まれているのだと思います。

今回の秋祭りに参加していた子どもたちの様子を見ていると、みんなやや？興奮気味で、とても楽しそうでした。きっと、小学生の時の思い出として、しっかりと記憶に刻み込まれ、私くらいの年齢になっても鮮明に思い出せることだと思います。

昨今、町内会活動そのものが存亡の危機と言われ、地域のお祭りも減少してきていると聞いています。そのような中でこのような貴重な機会をつくっていただいた、町内会をはじめ、関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

子どもにとっての「ふるさと像」

私は「ふるさと」と「出身地」は同意語ではないと思っています。子どもたちにとっては、たまたま親の都合で志免町に住み、小学校の時期を志免西小学校区で過ごしているだけです。

そんな子どもたちが「私のふるさと志免町ってね…」と語るためには、語るための内容が必要です。その内容とは、有名人の出身地であるとか、〇〇という大きな施設があるとかいうことではなく、成長段階その時々の体験が大切だと思います。

志免町は、人口密度が全国的に見てもトップクラスの高さの町です。このため、「多くの自然に囲まれて」とは言えない環境です。

また、以前お知らせしたように、日常のスマホやタブレットの使用時間は、本校の子どもたちも大変長くなっており、学校が終わると子どもたちは家の中で過ごしていることが多いことが分かります。友だち同士のつながりもオンラインゲームや SNS 上でのつながりが多く、同じ空間で語り合ったり遊んだりしている子どもは少ないのかもしれません。たまに公園で複数の子どもたちを見かけても、一緒にいるだけで、それぞれは端末の画面を凝視していたりします。

これはこれで、現代的なふるさとでの実体験なのかもしれませんが、年に一度の祭りで満面の笑みの子どもたちや親子のふれあいの様子を見ていると、これがふるさと志免の思い出となっていくんだろうなと思います。

高いお金を払って手に入れる特別感ではなく、身近な地域で味わうことができる特別感である「お祭り」が、ベッドタウンとなった志免西小校区にはあります。

子どもたちに「ふるさとの思い出」として語り継がれる行事として大切にしていただきたいと思いました。